

惨な最後を祖国に伝える事実伝達者としての意識をたかめるだけだと感じた。

## ソ連軍侵攻から入ソまで

石川県 荒木 吉 秀

昭和二十年八月九日、午前零時半、飛行機の爆音に深夜の夢を破られた。所は東滿牡丹江省東寧県の城子溝。

私は第一六野戦貨物廠の警備隊に属し、第三分哨の分哨長として勤務中であつた。

早朝五時半、低空で侵攻してきたのはソ連機、直ちに非常呼集がかけられ、三か所の分哨陣地は増員されて警備を厳にした。

午後、松花江を挟んで彼我の砲撃が聞こえ、本部建物に敵軽爆の爆弾が命中して、情況はいよいよ切迫した。命を受けた兵らがタイマツに点火して、何十とある野積物資の山に火を放って回る。たちまち白煙、黒煙が天地を覆う凄絶の巷と化した。分哨を焼却して後退の命が出

る。中隊の准尉が「青葉神社」に火を放った。

私は昭和十三年四月、中支の工兵部隊より復員、家郷にあること三年三か月で、昭和十六年の関特演に応募、牡丹江省掖河の歩兵第七連隊に入隊したが、二年後、転属して、国境の野戦貨物廠警備隊の勤務についていたのである。

八月十日、部隊は後退を開始、私物の賞状、通帳等すべて放棄する周章振りで、老黒山付近の遭遇戦で六名の死傷者を含み、羅子溝を経て十四日、朝陽川の四七貨物廠にたどり着いた。二百七十二キロの行軍であつたが、各地に分散駐屯していた我が部隊も漸く集結し得た。

この地一帯は、日韓併合のとき、日本への従属を嫌つて満州へ脱出した朝鮮人の部落が散在していたが、彼等も事態の対処に困惑しているように見えた。

十七日、隊長より「日本降伏」が告示され、翌日、下士官以下は兵器のすべてを大地に集積し、丸腰となつた。以後は木銃をもって、現地人らの襲撃、掠奪に抵抗するしかなかった。

九月一日、我が一六野戦貨物廠を主体とする捕虜大隊

が編成された。長は君塚見習士官。三日、私物、官物の携帯品の調査。五日は各隊員の出身県、職業、生年月日、官等級、氏名等の調査表作成。

六日、ソ連側から特業者——工兵、架橋の経験者、鉄道員、自動車運転と修理工、ペーチカ工、煉瓦、石工、左官、大工、指物、ブリキ工——の調査。

九月十四日、延吉出発、二百五十キロの行軍が始まる。ソ連輸送指揮官は少尉、乗馬で先頭を進み、十人足らずの兵が、道路を行く日本兵から左右十メートルほど離れて、田畑の中も憶せず平行して歩く、ご苦労なことだ。夕刻になると、指揮官は駆け回って宿営の適地を決めてくれる。十九日、琿春に到着。

二十日、十七時、国境——といっても境界の立て札もない——を越えてポシエツト市に入る。白壁の家が並ぶ異国風景に目を見張る。市民や兵士が物珍しげに行進を眺める。二十一日午後、一名の落後者もなくクラスキノに着いた。延吉からここまで百九十二キロを八日間、一日平均二十四キロの行軍であった。これも全員が倉庫にあった新品の肌着、軍衣袴、靴に替え、支給外の食糧

を携行したお蔭だった。

この行軍の途中で今も忘れられないのは、日本人の若い女性がトラックに積まれて我々を追い越して行く。その着衣も破れ、疲れ切った姿と、南に逃れ、あるいは北へ引き返してゆく開拓団の女、子供の哀れさであった。

九月二十一日、我が捕虜大隊はクラスキノの丘の斜面に宿舎を決められた。といっても天幕も毛布もない。炊事の薪を四キロも六キロも歩いて集めねばならなかったこと、ソ連兵に折あらばと時計をねらわれたこと、信用して預けた指揮官に、交替のまま持ち逃げされたことを憶えている。延吉では二万八千人が集められ、将校団と別々にされたが、彼等はどこへ行ったのであろうか。

十月十五日、初めてソ連のとてつもない大きな貨車に詰め込まれる。ウラジオへ行くものと思ひ込んでいたが、再びポシエツト着。

ここでシャワーだけの奇妙な移動浴場を浴び、着衣消毒を受けて再び乗車、全員の不安、失望のうちに、列車は北へ北へと走る。

十九日午後五時、輸送指揮官が初めて現況を明かす。

「現在地はコムソモリスク。一時間後アレキサンドルに着く。直ちに連結船でアムール河を渡河する。ここは北緯五十度、ポルトワニノ（間宮海峡のワニノ港）まで二百七十キロである……」

全員不安も失望も消しとんで、港から乗船して故国に帰る！！と大喜びであった。

列車は船に積まれて渡河、また走り続け、停車のたびに沿線の労務者（囚人）に物を盗まれたり、すでに入ソして伐採に従事している日本兵に遭ったりする。聞けば千島の部隊の由。

十月二十五日、駅もない山中で停車、全員下車。二百メートル離れた木立ちの中に収容所があった。ここが私が二十二年六月復員するまでいたムーリ地区の第一分所であった。やがて嚴寒の中、伐採作業が始まるのである。

## シベリア抑留体験記

静岡県 長谷川 喜一

昭和二十年八月九日午前零時、不寝番明け番交替直後爆音と同時に爆弾投下と機銃掃射の音に、アメリカのB二九かと思った。夜が明けて、部隊長が、ソ連軍が侵入してきて日ソ開戦となったとのことで、直ちに重病傷患者は汽車で後方に送り、独歩患者は原隊に帰し、病院を閉鎖し、十日午前零時、後退し牡丹江に到着、以来終戦まで、野戦病院を開設して傷兵の治療に当たる。多くの傷兵が入院し、その治療に当たる病院長の目から涙が滝のごとく流れていた。入隊以来、初めて戦争の悲惨を知った。

十五日、終戦となり、武装解除をされ、牡丹江に各部隊が集結、再度傷兵の治療に当たる。ソ連の貨物列車にて十一月三日、ちょうど明治節に満州綏芬河を經由、シベリアに入り、ハバロフスク第六分所に収容された。周